

つながりを意識した説明文読解の授業

～他領域と関連し考えの根拠を主教材から見出す実践～

中岡 正年

「問い続け、学び続ける子どもたち」をめざすためにも、子どもたちが主教材「アップとルーズで伝える」を読みたいと思うことが必要であると考えた。そのために、本単元の導入として、総合的な学習の時間で取り組んできた「わかやまポンチプロジェクト」のPR映像を視聴させ、その映像を自分たちで改善することを伝えた。

また、映像改善を行う際には根拠を主教材である「アップとルーズで伝える」の中谷氏の考えから見出すことも同時に伝えた。このように目的をもつことで子どもたちは主教材を主体的に読み解くことにつながると仮説を立て実践を行った。また情報端末の活用も行い、さらに本文の内容理解を図ることを試みた。活動観察やアンケート結果から、主体的に本文を読み解こうとする子どもたちの学習意欲の向上を感じられる結果が得られた。

キーワード：主教材、説明文、アップとルーズで伝える、中谷 日出、情報端末、わかやまポンチ

1. 研究目的

本年度の本校の国語科部は「つながりを意識して考える力を育む」をテーマにしている。学習の「つながり」とは子どもの「知りたい」「読みたい」「聞きたい」「伝えたい」といった意欲的な活動や思いが、単元を通して継続されることと捉えている。

そこで、本単元では、総合的な学習の時間の取り組みをまとめた映像を、国語科の学習を活かして、より豊かなものに改善するという課題に設定した。子どもたちにとって、関係の深いものを題材とし、主教材「アップとルーズ」とに関連づけることで、学習につながりをもたせるようにした。

主教材の「アップとルーズで伝える」は写真と文章が対応した段落構成がとられている。また、第4段落と第5段落は対比的に描かれ、第6段落でまとめられている。段落ごとに何が書かれているのかがとらえやすく、文章全体の組み立ても分かりやすい。そのため、アップとルーズの特性とその効果をとらえるのに適切であるといえる。

また、自分たちに関係のある映像作品を改善する課題を設けることで、主教材を読むことに必然性をもつことになる。このことにより、課題解決をするための話し合いを行う活動や主教材の内容理解を深める活動が高まり、主体的に学習に臨むのではと考えた。この仮説を検証するために活動分析やアンケート調査から考察を行うことにした。

2. 研究方法

本校の学校提案である「問い続け、学び続ける子どもたち」をめざすためにも、子どもたちが主教材「ア

ップとルーズで伝える」を読みたいと思うことが大切である。そのためには主教材をただ読み解くだけではなく、単元を通して作者の考えが自分たちの体験として活用されていくものとなれば、本文を読みたいという思いが高まると考えた。

そこで、本単元の導入において本クラスで年間を通して「総合的な学習の時間」で取り組んできた「わかやまポンチプロジェクト」のPR映像を視聴させることにした。このプロジェクトは本校が和歌山県庁食品流通課とファミリーマート、スイーツ制作のデザートランドとの共同で行っている取り組みであり、子どもたちが考えた「わかやまポンチ」は実際に商品化され、コンビニエンスストアにて販売された。

単元導入時に視聴させた際のPR映像は担任が作成したもので、製作者の意図をあえてわかりづらくしている。そのため受け手に情報が伝わりにくく、PRとしての効果は薄くなっている。

そこで、効果を高めるにあたり、主教材の内容を判断基準に位置づけた学習を進めることを伝えた。そうすることで、読むことの目的意識がより明確になると考えたためである。

さらに、映像改善の根拠を、主教材である「アップとルーズで伝える」の中谷氏の考えや、事実から捉えていくことにした。このことで、主教材を読み解くことが、自分たちの答えの根拠とすることになる。さらに、その答えをもとに、映像改善を行うには、思考と試行を繰り返すことになる。

また、映像改善の前段階では、話し合いの場面において、「アップ」と「ルーズ」の長所、短所だけで改善を図るのではなく、特定の写真を提示し「アップ」で表すか「ルーズ」で表すかどちらが良いかと、子どもたちの思考を揺さぶる場面を設けた。

に応じて授業者と相談しながら活動を行うことにした。また、情報端末だけではなく、事前に調べていた自分の資料や図書室の資料等も活用して良いことにした。さらに、活動に入る前に「情報端末活用ルール」を児童達自身に決めさせ全体で共有してから活動を行った。その際、1グループにつき1台の情報端末(iPad mini)を活用した。

なお、本実践の国語科の中では、情報端末は映像作品の視聴が主な活用であり、編集は単元の最後に行うことを子どもたちに伝えていた。

4. 授業の考察

4. 1. 単元終了後の感想と授業の手立て

単元終了後の感想文において、情報端末を活用することで「アップ」と「ルーズ」についてより理解が深まったという記述が多く見られた。

情報端末の特性として、簡単に操作を行うことができ、指先で自分の伝えたいことの写真を「アップ」や「ルーズ」にできることは、自分の経験を通して、文章との関連性を見出し、より深い理解につながったと感じていたようである。

国語科としての目標は以下のものであり、これらの目標達成のために他にも次のような活動を行った。

単元目標

- ・写真と文章を対応させて、説明的な文章に興味をもって読もうとしている。【関】
- ・それぞれの段落の役割を、本文の内容から理解することができる。【読(1)エ】
- ・目的に応じて文章の要点や細かい点に注意しながら読み、文章を引用したり、要約したりすることができる。【読(1)エ】
- ・指示語や接続語が、文や段落の関係を示す手がかりになっていることを理解している。【言イ(ク)】

これらの目標を達成していくための一つの手段として、映像作品の改善の根拠を主教材から見出すことや情報端末の活用を行った。これらのことは当然、中谷氏の主教材である「アップとルーズで伝える」の中での筆者の主張は何なのかに迫るためである。

特に「目的に応じて文章の要点や細かい点に注意しながら読み、文章を引用したり要約したりすることができる。【読(1)エ】」を達成するためにも、導入時の自分たちの経験と結びつけることが重要なことであると考えた。自分のたちと関係の深い映像作品を改善するために、中谷氏の文章を読むことを確認した。(図4)

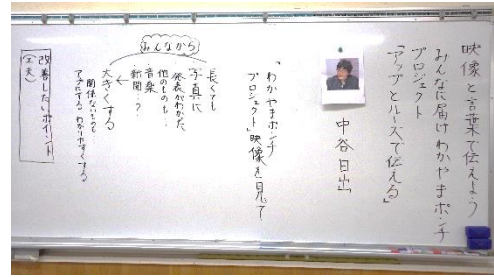


図4 中谷氏の紹介と自分たちの活動に関連させる場面

さらに、目標を達成するために、自分たちの経験と結びつけるだけではなく、小グループ活動を取り入れ、自分の考えを表出する場面を多く設定してきた。発表する機会が増えることで、自分の考えが本文のどの部分を根拠にしているのかをより明確にすることが必要となった。

このことで、自分の考えをより明確にするために本文を深く読み解くことにもなった。(図5)



図5 小グループでの活動場面

また、学習したことや子どもたちの思考が継続するように、教室に学習した内容の掲示を行い、学習内容をファイリングし、すぐに学習の振り返りができるようにした。(図6) (図7)



図6 教室掲示

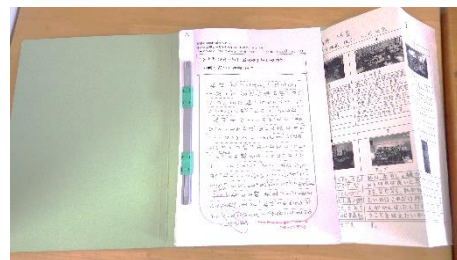


図7 授業ファイル

このような掲示や振り返りの工夫を行うことにより、本文の内容についてより理解し、知識の定着につながったとも考えている。

授業後の子どもたちの感想から、自分たちの活動が題材になっているから、興味をもって授業に臨むことができたという意見が多く見られた。また、情報端末を用いて、操作し実際に「アップ」と「ルーズ」へと操作することができたことも本文理解を深めるのに役に立ったと述べている子どももいた。

本実践では、主教材だけを読むのではなく、本文の中に自分の考えの根拠を見出すという目的をもたせた。

4. 2. 以前の説明文授業との比較

授業者側の目的は、上述した国語科の目標であり、映像作品を上手に改善させることではない。

しかし、子どもたちには自分たちに関係があることや映像を改善する目的をもつことで、本文を主体的に読むことにつながったと捉えていることがアンケート結果や観察からわかった。

もちろん中谷氏の文章構成が優れており、理解しやすい文書であったことも大きな要因であると考えられるが、子ども自身が読みたいと感じたことが内容の理解に大きくかかわったと感じている。

単純に比較することができないが、一学期に行った説明文の単元と今回の「アップとルーズで伝える」の単元を比較してみると次のような結果であった。

授業後に行ったテストの「読む」の領域において、クラスの平均正答率が、一学期の説明文単元の76%から、本実践では95%と大きく向上が見られた。

これは、それだけ本文の内容について正確に理解をしていた結果と考えている。

ところで、実践を行う前には子どもたちに情報端末を渡すことに戸惑いも感じていた。しかし、本実践においては、情報端末は「知りたい」、「行きたい」といった学習活動を支える教具となり、児童の学習意欲の向上と継続に影響を与えることになったといえた。

このことはアンケートの記述からも伺えた。(図8)

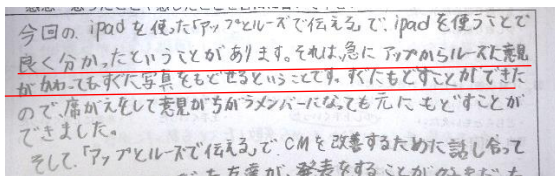


図8 情報端末活用の印象

5. 成果と課題

子どもたちにとって、自分たち自身に関係の深いものを題材としたことによって、単元を通して興味関心は非常に高いものであった。また、映像改善の根拠を主教材に見出すことを伝えたので、子どもたちの文章

の読み取りも1学期に行った説明文の学習よりも深く、ワークシートへの記述量も多くなり、結果として内容を深く理解していたと考えている。

懸念していた、情報端末の操作は授業の進行において支障はなかった。本実践では、子どもたちに活用のルールを決めさせ、その後は授業の目標達成のためであればある程度自由に活用することを認めた。多くの子ども達は情報端末を授業で活用する教具として認識し、目的に応じた活用を行っており、情報端末は児童にとって一つの教具として、自然と溶け込んでいた。

主教材で理解した中谷氏の考えについて「知りたい」、「行きたい」といった学習活動を支える教具となり、児童の学習意欲の向上と継続に影響を与えることになったと捉えている。

一方、個人の思考の変容が把握しにくいことが課題として挙げられる。

グループ活動に入る前に個人で思考する時間は設けてきた。このことはそれぞれ意見を持ち、授業中に意見を発表することになったが、個人の思考の変容はとらえにくい。

よって今後の展望として、個人の思考の変容が導入から結末まで、また毎時間の中での思考の変容も把握できるような見取りの方法、ワークシート等の工夫、などの研究も行っていきたいと考えている。また、他の教科でも活かせる部分を抽出して有効的な活用の場面を検証していくことも考えている。

参考文献

- ・教材に「しかけ」をつくる国語授業10の方法(2013年4月10日) 桂 聖
- ・和歌山大学教育学部諸学校 紀要 第三十九集(2016.3.)
- ・「タブレット端末・(学習者用) デジタル教科書活用授業意図の類型化」
第20回 日本教育メディア学会・年次大会
(2013.10.12-13.) 豊田 充崇